

日本中世英語英文学会
第33回 西支部例会

日時：2017年6月3日（土） 13:00～17:20

会場：関西外国語大学中宮キャンパス

〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町 16-1 072-805-2801（代）

アクセスマップ & キャンパスマップ：

http://www.kansaiandai.ac.jp/common/pdf/help.daily.information.n21_campusmap.pdf

総 会： 7号館 2階 7210 教室
研究発表： 7号館 2階 7210 教室
特別講演： 7号館 2階 7210 教室
懇 親 会： 厚生北館 2階第2 食堂

日本中世英語英文学会西支部事務局
〒514-8507 津市栗真町屋町 1577
三重大学教育学部 西村秀夫研究室内
TEL/FAX: 059-231-9312
E-mail: jsmeswest2017@gmail.com

第33回西支部例会プログラム

<休憩>

I 受付 (12:00~13:00 7号館2階7210教室前)

II 開会式および西支部総会 (13:00~13:30 7号館2階7210教室)
司会 井野崎千代子 (大阪産業大学他非常勤講師)

[開会式]

日本中世英語英文学会会長挨拶 地村彰之 (岡山理科大学教授)
開催校挨拶 谷本義高 (関西外国語大学学長)
日本中世英語英文学会事務局報告 大野英志 (広島大学准教授)

[西支部総会]

事務局報告 西村秀夫 (三重大学教授)
会計報告 地村彰之 (岡山理科大学教授)
会計監査報告 大野英志 (広島大学准教授)
会場案内 三浦あゆみ (関西外国語大学准教授)

III 研究発表 (13:40~16:00 7号館2階7210教室)

- (13:40~14:10)
第1次大戦戦地から生還した *Beowulf*—Wyatt 校訂版 (1894) と
Gollancz 教授の現代英語訳断片 (lines 1159b-1622)—
渡辺秀樹 (大阪大学教授)
司会 小塚良孝 (愛知教育大学准教授)
- (14:15~14:45)
中英語における「目」を用いた身体表現—「目を上げる」に着目して
渡辺拓人 (熊本学園大学講師)
司会 和田葉子 (関西大学教授)
- (14:55~15:25)
Chaucer の典拠を考察する—*The Monk's Tale*: 'Hercules' において—
笹本長敬 (大阪商業大学元教授)
司会 大野英志 (広島大学准教授)
- (15:30~16:00)
英語版『狐物語』の変遷—1481年の初版から19世紀の版まで—
都地沙央里 (福岡女子大学講師)
司会 平山直樹 (尾道市立大学准教授)

IV 特別講演 (16:10~17:10 7号館2階7210教室)

研究方法を見出し、研究テーマと出会う

向井 剛 (福岡女子大学名誉教授・四国大学教授)
司会 家入葉子 (京都大学教授)

V 閉会の辞 (17:15~17:20 7号館2階7210教室)

森ユキエ (同志社大学嘱託講師)

VI 懇親会 (17:45~19:45)

厚生北館2階第2食堂 会費 3,000円

【研究発表】

1. 第1次大戦戦地から生還した *Beowulf*—Wyatt 校訂版 (1894) と Gollancz 教授の現代英語訳断片 (lines 1159b–1622)—

渡辺秀樹 (大阪大学教授)
司会 小塚良孝 (愛知教育大学准教授)

2017年は第1次大戦の百周年期間で英文学の分野においても記念行事が多数行われているが、本発表も100年ぶりに見出された Gollancz 教授の古英詩 *Beowulf* の現代英語訳断片の価値を訴えることが主眼である。

10年以上前に発表者が入手した Wyatt 校訂 *Beowulf* (1894) には、表紙裏に I Gollancz のサインと共に “Sent to me in Flanders by Prof. Gollancz, H. S. B. 1916.” という別人の書き込みがあり、本の中に *Beowulf* の現代英語訳断片 (グレンデルの母親との闘争の場面を挟む 463 行分) が挟み込まれていた。この訳文の幾種類もの頭韻構造を駆使した文体と、Gollancz 教授の日本人学者への手紙の筆跡との比較によって判明した同じ書き癖から、この断片は教授自身が何らかの目的で書いたものと断定できる。

本発表では、訳文の頭韻や繰り返し表現の訳出の技法に注目し、中世頭韻詩の専門研究者の手になる他の現代英語訳 (例えば最近出版の Heaney 訳や Tolkien 訳など) と比較すべき名訳であることを論じつつ、Gollancz 教授が何故この部分を訳して、戦地にいる誰へ送ったのかをも推察したい。

2. 中英語における「目」を用いた身体表現—「目を上げる」に着目して

渡辺拓人 (熊本学園大学講師)
司会 和田葉子 (関西大学教授)

本発表では、中英語における「目」を用いた身体表現の中でも「目を上げる」に相当するもの — *heave, lift, throw (etc.) up eyes* や *look up* — を取り上げ、その用法を通時的に、また種々のテキストを対象にして横断的に探る。中英語の身体表現に主眼を置いた研究はまだそれほど蓄積があるわけではないようであるが、代表的な先行研究として、Benson (1980) や Burrow (2002) が挙げられよう。特に Benson (1980) は Chaucer における身体表現を扱った研究で、「目を上げる」に相当する表現についても触れている。たとえば *Troilus and Criseyde* に複数用いられているそれらの表現について、Habicht (1959) に従って “ceremonial” (e.g. II, 971) や “expressive” (e.g. IV, 1159) と分類し、物語の展開におけるその役割や効果を論じている (pp. 91, 93, 98)。管見ではこのように作家や作品ごとに論じられることの多い中英語の身体表現であるが、本発表では、それを鳥瞰的な観点から扱い、その使用実態を明らかにする。

Innsbruck Corpus of Middle English Prose (version 2.4, 2010) で “eyes” を検索し、それに「上げる」を表す動詞が共起する用例を収集したところ、中英語全体を通じ、「神や天に向かって目を上げる」という大なり小なり宗教的な文脈に多く見られることが明らかになった。(同様の傾向は古英語でも見られる。) これは、「目を上げる」に相当する身体表現がそのような宗教的文脈 (Habicht や Benson の “ceremonial” に当たると解釈できよう) から広まった可能性を示唆している。さらに “look up” の用例や韻文からのデータも追加し、また各用例の文脈による分類も行うことで、中英語における「目を上げる」に相当する身体表現の諸相を探りたい。

3. Chaucer の典拠を考察する—*The Monk's Tale* : ‘Hercules’において—

笹本長敬 (大阪商業大学元教授)
司会 大野英志 (広島大学准教授)

The Monk's Tale は、Fortune の気まぐれな仕業によって有名人たちが突然没落する話である。その古今の有名人たちの悲劇話を Chaucer はいろいろな典拠を利用して語る。ここに取り上げたギリシャ神話の英雄 Hercules の悲劇もいくつかの典拠を使って 6 つのスタンザで語られる。この話の最初の 2 つのスタンザでは Hercules の 12 の難業が(すべてではないが)列挙される。これは主に Boethius, *De Consolatione Philosophiae* iv. m. 7. 13–31 から取っている。ただ、たとえば第 2 スタンザの冒頭にこういう個所がある。He slow the crueel tyrant Busirus / And made his hors to frete hym, flessh and boon; (*MkT.* 2103–2104) ここではトラキアの王 Diomedes とエジプトの王 Busiris とが混同されている。Boethius はどちらの名も挙げていない (Boece の注釈には Diomedes の名がある) ので、Shannon (1929) は、この混同は *Heroides* ix. 67–70 の誤解から生じたと論じる。Ovid, *Ibis* 401–402 では Diomedes の名を挙げずにこれを言及している。第 4 と第 5 スタンザでは、妻 Deianira からおくられた Nessus の毒塗りのシャツによって Hercules が苦悶の死を遂げる話を短く要約する。この要約は、Ovid, *Metamorphoses* ix が念頭にあったらうと言われ、また Ovid, *Heroides* ix も読み、Deianira の嘆きを知っていたであらうとされる。Boccaccio, *De claris mulieribus* xxii にも Deianira の短い説明がある。ここでは Ovid の作品と比較しながら ‘Hercules’ を考察したい。

4. 英語版『狐物語』の変遷—1481 年の初版から 19 世紀の版まで—

都地沙央里 (福岡女子大学講師)
司会 平山直樹 (尾道市立大学准教授)

本発表では、英語版『狐物語』(*Reynard the Fox*)の、初版から 19 世紀の版までを通史的に観察する。『狐物語』の出版史は、テキストの特徴に応じて、大きく四つに分類することができる。まず、フラマン語からキャクストンが翻訳した本文が受け継がれた、1481 年初版から Edward Allde 初版の 1600 年まで、次に、1620 年の Allde 第 2 版から現れた、短縮された本文と欄外教訓をもつ版が標準版となる 17 世紀である。この期間には、二つの続編も出版され、作品の人気ぶりを知ることができる。そして三つ目として、人気が下火になりつつも、チャップブックなどを含む種々の版が読まれた 18 世紀、そして最後に、キャクストン初版に回帰しながら、時代の風潮に合わせて改竄が主流となった 19 世紀である。

英国での『狐物語』出版史の全体像は、Menke (1992) や Varty (2000) によってすでに示されているが、本発表ではそれを補足・補完する意図をもって、主だった版の特徴を詳らかにし、作品が辿った変遷と受容の様子を、書誌学と書物文化史の観点から考察する。

【特別講演】

研究方法を見出し、研究テーマと出会う

向井 剛(福岡女子大学名誉教授・四国大学教授)
司会 家入葉子(京都大学教授)

年甲斐もなく過去を振り返るのは、良寛さんに叱られそうです。しかし、この春に退職を迎えたこともあって、人生の節目にこれまでの研究を振り返り、これからの課題を定めたいと考えます。(正しくは、新しく語り得る材料を持つことができている現状があります。)

研究の過程を振り返るのは、(私たちの世代にあっては) 師を語ることに重なりますが、研究の方法を見出すのはそう簡単なことではなかった個人的経験を若い大学院生の人たちと共有することができれば、と思います。

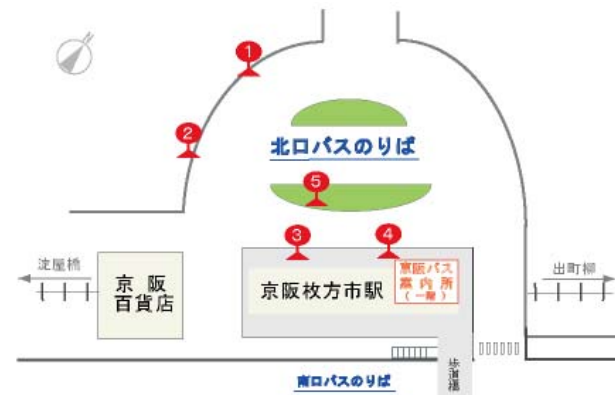
関西外国語大学中宮キャンパス

〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町 16-1
072-805-2801 (代)

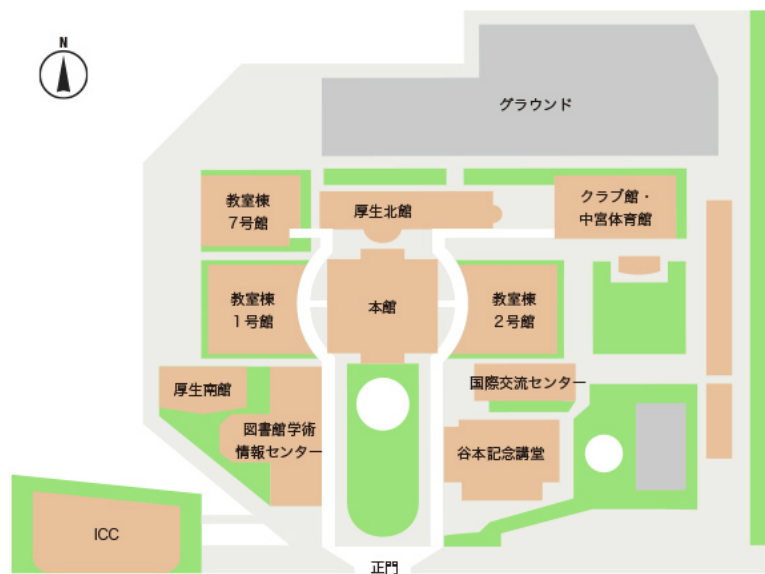
最寄駅： 京阪本線「枚方市」駅

新大阪駅	4分	大阪駅	7分	京橋駅	15分	京阪 枚方市駅
	JR東海道本線		JR環状線	京阪電車		
	9分	淀屋橋駅		21分	京阪電車	
	地下鉄御堂筋線					
京都駅	8分	丹波橋駅		19分	京阪電車	京阪 枚方市駅
	近鉄奈良線					
関西空港	44分	京橋駅		15分	京阪電車	
	JR線					
	32分	なんば駅	5分	淀屋橋駅	21分	京阪電車
	南海特急ラピート		地下鉄御堂筋線			
大阪空港	36分	門真市駅		15分	京阪電車	京阪 枚方市駅
	大阪モノレール					

「枚方市」駅からは、北口バス乗り場3番・4番から約8分、4つ目の「関西外大」で下車、または徒歩約20分。



キャンパスマップ



受付・総会・発表会場	7号館 2階 7210 教室
運営委員会会場	7号館 2階 7207 教室
懇親会会場	厚生北館 2階第2 食堂

日本中世英語英文学会西支部会則

第1条 (名称) 本会は日本中世英語英文学会西支部 (The Western Division of the Japan Society for Medieval English Studies) と称する。

第2条 (目的) 本会は日本中世英語英文学会の支部機関として同会と連携しつつ、支部会員の研究の促進と交流のために寄与することを目的とする。

第3条 (事業) 本会は第2条に定めた目的を達成するために次の事業を行う。

1. 研究発表会および支部総会の開催 (年1回)
2. 講演会の主催および共催
3. 各種情報の連絡・通知
4. その他必要と認めた事業

上記の事業を行うために支部会費を徴収する。会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。

第4条 (会員) 本会は第2条に定める目的に賛同し、会費を納入するものを会員とする。

第5条 (役員)

1. 本会に次の役員を置く。
支部長 1名 運営委員 5名 監査委員 1名
支部長および監査委員の任期は2年、運営委員の任期は3年とし、原則として再任は認めない。ただし、1期以上の間において再任され得るものとする。
2. 役員の職務
(イ) 支部長は本会を代表し会務を統括する。
(ロ) 支部長は運営委員会を招集してこれを主宰する。
(ハ) 運営委員は本会を運営する。
(ニ) 監査委員は本会の財産および事業の執行状況を監査する。
3. 役員を選出
(イ) 支部長は運営委員の推薦 (互選を含む) により支部総会にて承認を受けるものとする。
(ロ) 任期満了に伴う運営委員の補充は運営委員会の推薦によるものとする。
(ハ) 監査委員は運営委員の推薦により総会にて承認を受けるものとする。
(ニ) 支部長が運営委員の中から選ばれた場合はその運営委員の補充を行うものとする。

第6条（会則の改正） 本会則の変更は運営委員会が発議し、支部総会で決定する。

付則 本支部会則は2001年6月17日から施行する。

細則

- (1) 第5条1項に定める運営委員の構成にあたっては分野および地域性を考慮する。
- (2) 第5条1項に定める運営委員は半数改選（2名もしくは3名）を原則とする。
- (3) 在外研究その他の事由で支部長、運営委員、監査委員に欠員が生じた場合は、第5条第3項の規定に準じて補充する。
- (4) 第4条に定める会費は年額2,000円とする。

修正細則：一般2,000円の他に、非常勤講師・退職者・学生1,000円、70歳以上で一般会員として20年以上経過した方の終身会費10,000円の制度を設ける。

附則(1) 本細則は2001年6月17日から、本修正細則は2009年6月14日から施行する。

附則(2) 2016年6月4日一部修正する。

2017年度日本中世英語英文学会西支部事務局

支部長：西村秀夫

運営委員：井野崎千代子 小塚良孝 小宮真樹子 三浦あゆみ
森ユキエ

監査委員：吉川史子

◎日本中世英語英文学会西支部の振替口座番号は以下の通りです。会費の納入などにご利用ください。

ゆうちょ銀行 01320-7-90883

(他金融機関から 当座 139 0090883)

加入者名 日本中世英語英文学会西支部

514-8507 津市栗真町屋町1577

三重大学教育学部 西村秀夫研究室内

支部長 西村秀夫